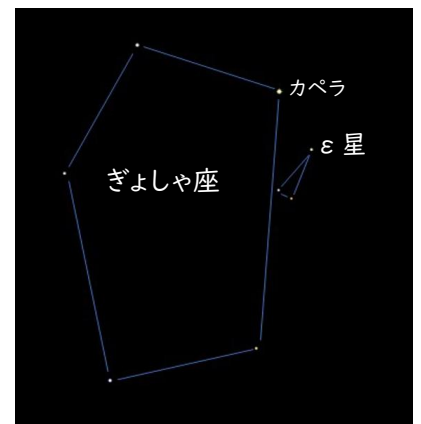




ぎよしゃ座イプシロン(ϵ)星

ぎよしゃ座は0等星のカペラを含む、冬を代表する星座です。全体は五角形の星の並びをしています。カペラのすぐそばには、小さな二等辺三角形の星の並びがあり、その頂点にあるのが、普段は3.4等星の ϵ 星です。この星は27年のうち1年ほど、明るさがおよそ半分になる(減光する)変光星です。半分と言っても等級の差は0.8等なので、なかなか気づきにくい、わずかな変化です。19世紀、発見された当初は、明るい星の周りを暗い星が周っていて、時々明るい星が覆い隠されているのではないかと考えられました。しかし、そもそも丸い星を丸い星が隠すのでは、1年もの長い間の減光は説明できません。



ぎよしゃ座イプシロン星の想像図

減光のたびに、その時々観測者が、その時の最新の機器を使って観測を行いました。27年という年月は宇宙では、ほんのわずかな時間ですが、その間に天文学や観測技術は大きく発達します。観測する人の世代も代わるほどです。観測者は結果を説明するため、その時まで蓄えられた天文学の知見を基に、さまざまな仮説を提案します。外側が半透明な大きな星の存在説、ブラックホー

ルとそれを取り巻くチリの円盤説などがありました。しかし、どれも一長一短があって満足のいく説明はなかなかできません。

最近の減光の時(2009-11年)のアメリカのスピッツァー宇宙望遠鏡の観測では、黄色い主星の周りを、大量のチリの円盤を持った青い星(上の図参照)が周っているらしいことが分かりました。でも、まだ確定というわけではありません。次の減光は2036-38年頃と予想されます。より詳しい姿が、あなたの手によって解明されることでしょう。

2022年1月16日記 (解説員: 田部 一志)